

# IDACAだより

第18号 平成29年1月27日

● 編集発行  
(一財)アジア農協振興機関  
責任者：今野 正弘  
東京都町田市相原町 4771  
TEL: 042-782-4331  
FAX: 042-782-4384



## ～ 新たな年に向けて ～

新年にあたり、謹んでごあいさつを申し上げます。

昨年は、国内においては4月の熊本における地震や8月、9月の台風による被害など、多くの自然災害が発生しました。被害にあわれた皆さまに対し、心よりお見舞いを申し上げます。

さて、本年は酉年ですが、鶏は古くから人に時を報せる動物であります。昨年は、政府における「農業競争力強化プログラム」の策定や、国会におけるTPP協定の批准など、日本農業に大きな変革をもたらす出来事が相次ぎました。そうした一年が明け、新年の始まりとともに、私は大変革期の始まりを告げる鶏の鳴き声が響いているように感じます。

折しも、日本農業は、農業者の世代交代という構造問題、日本全体の人口減少に伴う国内需要の減退、さらには世界規模での農地・水・食糧の争奪戦といった環境変化にさらされており、私たちJAの事業や運動も、否応なく改革を求められております。

改革は時として耐え難い苦痛を伴うこともありますが、協同組合理念を共有するJAグループの組合員、役職員が一致結束し、私たちが決めた自己改革にまい進すれば、必ずやこの苦境を好機に転換することができる、確信いたしております。

一方、国際社会においては、協同組合の評価が高まっています。昨年11月に国際連合教育科学文化機関（ユネスコ）は、協同組合をユネスコ無形文化遺産に登録することを決定いたしました。これは、協同組合の理念や事業が高く評価された結果であり、全世界で展開されている協同組合運動が人類の大切な財産であり、この運動を受け継ぎ、発展させていくことが国際社会から求められているということです。こうした国際社会の評価の後押しを受け、我々は、地域を大事にする組織としての協同組合を、より多くの人に知ってもらう運動を積極的に展開していかねばなりません。

JAグループの一員であるIDACAは、設立以降、50年以上の歴史の中で世界における協同組合運動を担う人材育成に貢献してきました。今後とも世界の協同組合の仲間と連帯しながら協同組合の思想と実践をさらに発展させ、よりよい社会作りに貢献していく所存です。



IDACA理事長  
(JA全中会長)  
奥野 長衛

### 《目次》

- 新たな年に向けて ～理事長挨拶 ..... 1
- 研修事業報告 ..... 2
  - (1) 2016年度 ICA 農協事業強化研修
  - (2) 2016年度 ASEAN キャパシティビルディング研修
  - (3) 2016年度 JICA 農業政策企画コース
  - (4) 2016年度 ICA 農村女性組織リーダー能力向上研修
  - (5) 2016年度 JICA 農業協同組合の組織化推進と事業運営能力の向上(B)コース
- IDACA 研修員の課外活動 ..... 7
  - (1) 高校生との交流会
  - (2) JA 全国教育センター・マスターコース受講生とのスポーツ大会
- 編集後記 ..... 8

← 研修事業報告 →

### (1) 2016年度 ICA農協事業強化研修

本研修は農協がある程度発展しているアジアの中進国を対象とした研修であり、今年度が3カ年事業の最終年度となります。今年度はインド、マレーシア、モンゴル、フィリピンの4カ国から6名の協同組合の役員を招聘し、日本の総合農協の事業（営農・販売事業、信用・共済・厚生事業など）を網羅的に学習しました。東京近郊ではJA 共済幕張研修センター、JA 全農営農・技術センターやJA 全農青果センター(株)の神奈川センター、服部牧場や雪印メグミルク海老名工場を視察。7月の最終週には昨年に引き続き静岡県を訪問し、JA 静岡中央会の静岡県農業研修会館、JA 静岡経済連のパールライス袋井工場、JA 静岡厚生連の静岡厚生病院、JA 大井川、JA 遠州中央、浜松市中央卸売市場を訪れ、県内の農業の概況や



JA 全農青果センター(株)神奈川センター訪問

JA 静岡グループの様々な取り組み、県下の厚生事業や高齢者福祉事業の概況、JA 静岡経済連の

販売事業、単協の青壮年部の活動や直売所の運営方法、卸売市場の役割等について学びました。また今年度は静岡県から長野県に移動し、6次産業化の事例としてJA 信州諏訪の醤油加工施設や(株)宮坂醸造を視察しました。研修員はJAの総合事業から自国の農協を改善・強化するア

イデアを多数得ただけではなく、各視察先でご協力頂いた関係者の皆様との束の間の交流を通じて日本国・日本人に対する親近感を深めておりました。研修員は本研修を通じて得たアイデアを盛り込んだアクションプランを完成させ帰国し現在計画実現に向け尽力しております。



### 研修を受け入れて

JA 大井川 営農販売部  
部長兼直販課長 谷澤 一康

平成28年7月25日(月)、当農協では2回目となるICAリーダー育成研修の受け入れとなりましたが、今回は当JAの青壮年部の役員との活動紹介を中心とした交流会とJAの総合事業の概要として管内の静浜支店と隣接する営農経済センター、ファーマーズマーケット(まんさいかん静浜)、静浜給油所の現地視察をして頂きました。

本店では組合長にも直々の挨拶を頂き、青壮年部のパワーポイントによる活動紹介と意見交換で大変に白熱した交流会となりました。

また、昼食では日本の「和食」を意識した食事処のたたずまいと料理内容でのおもてなしに心掛けておりますが、ベジタリアンの研修員の参加もあり食事会場では皆さん一人一人の反応が毎回楽しみで笑いの絶えない昼食となりました。

各国を代表して参加される研修員の皆さんが、自国に帰って実践する農業の事業強化に少しでもお役にたてること、日本のJAグループの中でのJA大井川を認識して頂き、時には思い出して頂ければ幸いです。



池谷組合長(中央)、谷澤部長(筆者、右から2人目)、杉本営農生産部長(右端)と一緒に

## (2) アセアン諸国等のキャパシティービルディング支援事業による 「農協を通じた農産物直売所の管理運営」研修

JA 全中がアセアン事務局より受託した「アセアン諸国等のキャパシティービルディング支援事業」の一環として本邦研修を、アセアン 10 カ国より 20 名の研修員を招聘し、2016 年 8 月 14 日から 8 月 27 日までの期間、IDACA で実施しました。

東南アジア諸国連合 (ASEAN) は 2015 年末の経済統合を果たしましたが、農業分野ではいくつかの共通課題を有しており、中でも農協などの組織強化を通じた取り組みが必要とされています。これを受けて、今回の研修では、日本の JA が運営する農産物直売所の運営管理手法等を学び、アセアン加盟国における実践可能な農産物の販売方法を探ること

を目的とし、それに沿った講義、現地視察などを設定しました。現地研修では群馬県を訪問し、県内 5JA (JA 前橋市、JA 佐波伊勢崎、JA 甘楽富岡、JA あがつま、JA 邑楽館林) とそれぞれの管内にある 5



JA 全中、アセアン事務局スタッフも参加した IDACA パーティー

つの直売所とインショップ、農産加工所を視察し、加えて地方卸売市場も見学し、農産物の流通の仕組みや販売方法の多様性などを学び、研修員の皆さんは大いに刺激を受けていました。研修の最後に自国にあった直売所の立ち上げやインショップの導入などをテーマとしたアクションプランを作成し、自国での活動に意欲をみせていました。



### アセアン諸国から研修員を受け入れて

JA あがつま  
専務理事 山崎 拓美

2015 年、2016 年と 2 年連続してアセアン・キャパシティービルディング研修を当 JA で受け入れさせて頂きました。個人的には ASEAN、インドネシア、タイから農業研修生、現在は卒が技能実習生として受け入れています。研修生受け入れ事業に 27 年間携わってきた者として、今回の受入れは縁を感じました。

群馬県での現地研修は、JA が運営する農産物直売所の運営管理と農産加工品の販売方法等が主な目的とので、当 JA では「沢田の味」として人気の高い漬物加工場とそれを販売している直売所の視察を中心にプログラムを組ませていただきました。アセアン 10 カ国から 20 名を超える参加者でしたので、質問の内容も多岐にわたり、農産加工事業に対する各国の関心の高さに驚かされました。

また、昼食は日本のおもてなしの心と和食への造詣を深めていただくために、当 JA 直営の会席「あさひ」で皆さんに会席料理の昼食をご堪能いただきました。四季折々に食材や器、盛り付けが変わることなど説明しながら日本の文化にも触れていただく機会を持ちました。今更ながら ASEAN の人たちの日本食文化への理解が醸成されていて隔世の感がありました。20 年前には刺身を味わえる ASEAN 地域からの来日者はそう多くはいませんでしたから。

片言のマレー語 (インドネシア語) や英語で研修外の交流が出来たことも喜びの思い出です。またこのような機会に恵まれ交流が継続し、彼らのスキルアップに私どもの取り組みが少しでもお役に立つことが出来たら光栄です。



JA あがつま管内沢田農産加工施設にて

### (3) 2016 年度 JICA 農業政策企画コース

本研修は、日本の農業発展を支えている様々な行政支援や法律的な枠組み、さらには農民組織の取り組みについて学ぶことで、自国における現行の農業政策や既存制度の改善や農民組織の振興などに有効な知見を深め、そうしたアイデアを活用して自国の農業開発に資する行動計画を策定することを目的としています。今年度は、アジア、アフリカ、中米、東欧の国々から 17 名の行政官が参加し農林水産省の役割や日本の現在の農業政策、農業基盤整備、農協、青果物の流通、農村金融、6 次産業化等について学習し、計

画立案やモニタリングに役立つ PCM（プロジェクト・サイクル・マネジメント）手法の演習も行いました。現地研修では秋田県を訪れ、県レベルの農業振興計画について学び、実際の取り組み事例を視察しました。加えて県下の農協組織やその関連施設も見学しました。さらに市町村レベルの取り組みとして神奈川県川崎市の農業振興計画についても学びました。研修で作成した行動計画については、帰国後さらなる検討・改善が加えられ現在実施に向けて準備段階にあるとの進捗報告が研修員から寄せられています。



川崎市の農業振興計画に係る視察  
JA セシサ川崎の直売所にて



#### 「農業政策企画」研修を受け入れて

JA 秋田中央会 地域政策部  
農政広報課 課長 安杖 和彦

私が IDACA の方とお会いしたのは今回が初めてです。現在の部署に異動になったのが 2016 年 4 月であり、これまで JICA 研修受入の経験はありませんでしたが、早期に打合せをしていただいたこともあり、無事に役目を果たすことができました。

研修では、どのように説明すれば容易に理解していただけるのか不安でしたが、IDACA 担当者の明らかな通訳により、その後の質疑応答を含めて秋田県農業ならびに JA 組織の概況について、十分に意見交換ができました。

「協同組合」がユネスコの無形文化遺産に登録され、協同組合の思想と実践が人類の大切な財産であると認定されました。今回の研修受入は、地球的視野に立った協同組合間連携であり、「JA 綱領」にある「民主的で公正な社会の実現」に向けた取組であると考えています。本県にお越しいただいた方々は、それぞれの国において、主に農業政策の立案などを担当されると伺いました。皆様のご活躍を心よりお祈り申し上げます。



JA 秋田中央会を訪問し役職員の皆さんと

#### (4) 2016年度 ICA 農村女性組織リーダー能力向上研修

地域活性化に重要な役割を果たす農村女性の組織的な取組みの支援を目的とした本研修は、東南アジア諸国ならびに南アジア諸国の女性リーダー8名を対象として2016年9月6日からタイ国で1週間、その後日本で約3週間実施しました。

日本のプログラムでは三重県を訪問する機会に恵まれ、JA 三重中央会、JA いがほくぶ、農事組合法人あぐりぴあ伊賀、女性農家等の視察を通して、農協の仕組みや女性組織の活動、農家の状況について等幅広く学ぶことができました。

また、近郊視察では JA 湘南、JA グループ神奈川教育センターを訪問し、経済事業ならびに

教育活動について理解を深めました。実務的な内容に加え、日本の農村女性の活気や力強さに大きく励まされた研修となりました。



JA いがほくぶ管内、からさわ農園さんを訪問



#### IDACA 研修に携わり感じた事

JA いがほくぶ 総合企画室  
係長 角田 美智子

ICA 農村女性組織リーダー能力向上研修は今回で2回目の受け入れになります。

2回目とはいえ、前回の受け入れからは、一年たっており、1からの準備にやはり心配が先に立ちました。そのような中、東京からわざわざ事務局の方が事前打ち合わせに来ていただき、大変心強かったことを覚えております。

研修は、JA いがほくぶの近況や女性理事として JA 運営へのかかわり方、女性組織の活動紹介、アスパラ選別場見学、昼食と交流などあっという間に1日が過ぎました。交流の中で同じアジア地域でも、日本よりも女性がリーダーとして活躍されている国や、女性の地位がまだまだ低く扱われている国があることに驚かされました。

また協同組合がない国では、隣人と何かを共同でする習慣がなく、協同活動への温度差も感じました。今回の研修で、同じテーマで誰かと活動する事の楽しさや心の豊かさを、少しでも感じていただき、協同活動に少しでも興味を持っていただけたら嬉しく思います。



JA いがほくぶ女性部の皆さんと直売所前で

## (5) 2016年度 JICA 農業協同組合の組織化推進と事業運営能力の向上(B)コース

JICA の委託を受けて、今年度より新たに始まった東ヨーロッパの旧社会主義国を対象としたコースで、アルバニア、ジョージア、コソボ、マケドニア、モルドバ、タジキスタン、ウクライナの7カ国から9名の研修員が参加し、2016年9月19日から11月12日までの期間実施しました。

市場や資金アクセス、農産加工による付加価値創出、EU加盟を見据えたEU基準に見合った生産・販売・流通システム構築などの課題は小規模家族経営農家の単独活動では解決困難であり、農協などの組織強化を通じた取り組みが必要とされています。そのため、社会主義的協同組合を解体し自主的な農業協同組合を設立する上で、必要な知識や情報を得ることがこの研修の主な目的となっています。

視察研修では、神奈川県 JA はだの、広島県 JA 三次、長野県 JA ながの、JA 松本ハイランドを訪問し、日本の JA の運営管理手法を学びました。

また販売流通手法等を学ぶために、大田市場、JA 全農青果センター(株)、各 JA の直売所、道の駅八王子滝山などを訪問し、農産物の付加価値創出の手法を学ぶために、三次ワイナリー、雪印メグミルク海老名工場、服部牧場などを訪問しました。

研修後半では発展途上国に専門家として派遣され、プロジェクト運営な

どに携わってこられた方々の経験談を聞く機会を持ち、それぞれの局面で自国において活用できるヒントを得ることができたと好評のうちに終了しました。



雪印メグミルク海老名工場にて



### 農業の取り組み方や食文化の違いを学ぶ

JA 松本ハイランド 営農部  
営農企画課 課長 浅田 敏之

人事異動により春から現在の部署に赴任し業務に携わる中で、IDACA との交流は今まで経験の無い業務であり緊張の連続でありました。本年度は6月に開催された「農業協同組合の組織化推進と事業運営能力の向上 (A) コース」の講師として初めて IDACA にお世話になり、10月は「(B) コース長野県現地研修」において、当組合を訪問いただき農業施設の説明を含め講師をさせていただきました。

10月24日～28日に開催された現地研修は、東欧の7カ国より9名の研修員が参加し、長野県下の JA や農業関連企業の視察研修が行われました。

最終日28日に当 JA の研修があり、午前中は JA の概要や生産販売計画作成についての研修を行い、午後は米の低温倉庫や、野菜集出荷施設等の視察研修を行いました。米の低温倉庫はラック式の倉庫であり、日本でも数カ所しかない施設であるため興味深く視察されている姿が印象的でした。

今回の研修会を通して、9名の研修員と交流を行う中で、宗教的な食文化の違いや、農業への取り組みの違いを知る事ができ、私としても身になる研修会でありました。

今回の研修を含め研修員の皆様が日本に滞在する期間は短期ではありますが、日本で学んだ事が、多くの国の農業発展に繋がることを期待したいと思います。



JA 松本ハイランド管内の山辺ワイナリーにて昼食。ス々の洋食とワインにご満悦

## 《IDACA 研修員の課外活動》

IDACA 滞在中の研修員の生活は、基本的に午前 8 時半からの朝食に始まり、9 時半から 12 時までの講義、昼食休憩をはさみ、午後 1 時半から 4 時までの講義となります。午後の講義終了から午後 6 時の夕食時間までは、自主的にグループ討議をしたり、散策やジョギングに出かけたり、スポーツをしたりして自由に過ごします。

また、研修以外にも、研修員の皆さんが日本文化に触れたり、日本人と交流する機会を持てるよう、IDACA 総務部、教務部と連携し、研修員の余暇を利用した様々なイベントを企画しています。今回はその一部をご紹介します。

### (1) 高校生との交流会

9 月 25 日(日)、IDACA の中庭にて千葉県の中・高校生ならびに JA 全国教育センターのマスターコース受講生らと IDACA 研修員との交流会を開催しました。昨年に引き続き 2 回目のバーベキュー交流会となりましたが、今年も天気に恵まれ、研修員の皆さんも高校生やマスター生とともに母国料理に腕を振るいました。また、料理や会話を楽しんだ後は、カラオケ大会となりそれぞれが素敵な歌声を披露してくれました。



### (2) JA 全国教育センター・マスターコース受講生とのスポーツ大会



10 月 20 日(木)、JA 全国教育センターの体育館をお借りして、IDACA 研修員とマスターコース受講生とのフットサル大会を開催しました。参加チームはマスターコース 2 チーム、IDACA 研修員東欧チーム、同アフリカチームの 4 チームがトーナメント方式で、まさにワールドカップさながらの激しい戦いを繰り広げました。決勝戦はマスターコース A チームと B チームの日本人同士の



対戦となりましたが、マスター生からの申し出で、マスターコースの選抜チーム対 IDACA 東欧・アフリカ研修員選抜チームで戦うこととなりました。サッカーのレベルはヨーロッパが上であると自負する東欧の研修員と、身体能力に勝るアフリカの研修員が一つのチームを作り、プライドを賭けて日本チームとの対戦に臨みました。結果は気迫に勝った IDACA 研修員選抜チームの勝ちとなりました。試合後はお互いの健闘を称え合い笑顔の握手となりました。



お互いの健闘を称え合い、参加者全員で記念撮影



東欧チーム



アフリカチーム

### 編集後記

最近、野生のイノシシやシカなどの肉「ジビエ」が人気となっている。普段はめったに口にすることのない高級食材だが、近年は身近なものとなりつつあるようだ。

高尾山に程近い自然豊かな場所に位置するここ IDACA でも野生動物を目にすることは珍しくない。しかし野生の鳥獣が増えすぎ、農作物を食べ荒らしたり、スギやヒノキなどの樹皮や高山植物を食害するなど、農林業や自然環境にとって大きな問題となっていることも事実だ。IDACA 周辺でも猟友会の方々が害獣駆除のためイノシシ捕獲用罠を仕掛けている。そのような中、昨年の暮れ、隣接する JA 全国教育センターの敷地内に仕掛けられた罠に体重が 80 キロを超える大きなイノシシがかかったとの情報が入った。その肉を使って猟友会の方が作ったイノシシ鍋を IDACA もお裾分けに預かり、貴重な「ジビエ」が仕事納めのメインディッシュの一つとなった。

1月3日付けの日本農業新聞の一面にも「今年の夏までに日本ジビエ学会発足」という記事が掲載されていたが、農業被害をもたらす害獣をただ駆除するのではなく、衛生管理・市場流通の仕組みを作ってその肉を有効活用していけば地域の活性化にもつながり、庶民も「ジビエ」料理をもっと楽しめるようになるのではないかと期待を持って拝読した。

とはいえ、もともと自然の中で生きてきた動物たちの住家を奪い、彼らが住みにくい環境を作ってきたのは人間であることを忘れてはいけない。

